

194 パリ・ノートルダム大聖堂と首里城（2023 年 9 月 14 日）

2019 年 4 月 15 日、パリのノートルダム大聖堂が炎に包まれ、尖塔が崩れていく様子を写した映像は、世界に衝撃を与えました。懸命の消火活動が行われましたが、大聖堂は甚大な被害を受けました。同日のうちに、マクロン大統領は現場を訪れ、大聖堂の再建を発表しました。同年 12 月にパリ・ノートルダム大聖堂再建公設法人が設立され、大聖堂の再建に向けたプロジェクトが始動しました。2024 年末の完了を目指して、再建工事が進められています。



大聖堂の再建に当たっては、研究者、建築家や技術者の専門知識と、様々な分野の職人の技の粋を集めて修復が行われています。パリにある建築遺産博物館において開催されている「パリ・ノートルダム大聖堂：建築家から修復家へ」展では、焼け跡が残る石（写真右）や炭化した木材、修復を終えて大聖堂で使われる予定の像やステンドグラス（写真右）、パイプオルガンのパイプや絵画を展示しています。これらを間近で見ることができるのは、大聖堂が再び一般公開されるまでの期間限定です（展覧会は、2024 年 6 月 2 日までの予定）。



ノートルダム大聖堂の火災から約半年後の 2019 年 10 月 31 日、日本でも貴重な建造物が火災で失われるという悲しい出来事がありました。それは、沖縄県那覇市にある首里城の火災です。火災によって城の建物は全焼し、数多くの貴重な資料が失われました。首里城の火災のニュースを知ったパリ消防旅団長は、すぐに那覇市消防本部長に対して、地域や国を代表する文化財を失った悲しみに共感を示し、速やかな修復を願う書簡を出しました。これに対して、那覇市消防本

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

部長は、書簡は消防署員と沖縄市民に勇気と希望を与えるものであるとして謝意を述べ、ノートルダム大聖堂の一日も早い復元を願う返書を送りました。

首里城は、1429 年に成立した琉球王国の王家の居城でした。火災の前は、赤い正殿が特徴的な城（写真右）でした。しかし、実は首里城は、1945 年の沖縄戦の戦火で焼失し、戦後に復元されたものでした。さらに歴史を遡れば、首里城は火災による焼失と再建を繰り返してきました。



翻って、ノートルダム大聖堂の歴史を紐解くと、大聖堂も火災や荒廃といった危機を乗り越えて、繰り返し再建や修復が行われてきました。ヴィクトル・ユーゴーは、1831 年に小説「ノートルダム・ド・パリ」を発表し、当時の人々に痛みが激しかった中世の建築物に対する価値を再認識させ、建築家ウジェーヌ・ヴィオレ＝ル＝デュックによる大規模な修復工事が行われました。大聖堂の修復の歴史は、パリのシテ島地下遺跡で開催されている「ノートルダム大聖堂：ヴィクトル・ユーゴーからウジェーヌ・ヴィオレ＝ル＝デュック」展で解説されています（2023 年 12 月 31 日まで）。

パリ・ノートルダム大聖堂と首里城正殿。この二つの建造物は、これまでに何度も消滅の危機にさらされましたが、何度も再建や修復がなされ、2019 年の火災を経てもう一度再建されることが決まっているという共通点があります。文化遺産を未来につなぐとは、どのようなことを意味するのでしょうか。そのために、私たちは何をしたらよいのでしょうか。日仏の専門家が監修した電子展覧会「パリ・ノートルダム大聖堂と首里城-2019 年の火災を超えて復元と文化遺産の価値を考える」<https://www.notredame-shurijo.com/index.shtml> をご覧ください。